

## 論文の内容の要旨

論文題目

戦場へ征く、戦場から還る  
——火野葦平、石川達三、榊山潤の小説から——

氏名 神子島 健

本論は日中戦争開始後、火野葦平『麦と兵隊』によってブームを迎える「戦場の小説」（戦場を描いた小説）に関する研究を出発点としている。その上で、戦場の小説、当時戦争文学と呼ばれたそのジャンルの立ち上がりに深く関わった火野葦平、石川達三、榊山潤という三名の作家の作品を対象に、そのブームが去った後、戦後初期（1948年）までの時期を考察している。戦場へ向かう兵士や、戦場から故郷へ帰る兵士が、出征・帰還（復員）が実際に行われている最中にどのように描かれたのかを論じたものである。

ただし本論は作品に描かれた兵士たちのイメージ分析が最終的な目的ではないし、作品の（純粋に）内在的な評価をする狭義の文学研究でもない。戦時中の戦争文学といえ、ブームで戦争を煽ったがゆえに戦後すぐにおいては批判の対象であった。1960年前後になると、もはや戦時中を際立たせる文学史のエピソードとなってい、その作品に当時若くして出会ったような一部の人々以外は論じなくなっていく。しかしその作品の中には単なるプロパガンダとしては片づけられないものもあり、そして（それゆえ）当時多くの人々が戦場の小説に熱狂したという事実は、戦場の小説を真剣に考察する必要があることを意味している。近年は多少の見直しが進んできているが、本論では以下のような視角から論じていく。

検閲なども含め、雑誌や新聞などのメディアや文壇内の力学の中で、戦場や兵士を小説に描くことが当時持った意味を考察していくとともに、それを通して戦時、戦後初期の日本社会において戦争や兵士が担っていた意味を問い直す、広義の社会科学研究である。本論は十五年戦争に関する歴史学の研究蓄積と日本近代文学研究を基礎に、日本近代思想史やメディア論なども参照しつつ、当時の雑誌などの一次資料を用いて執筆した、いわば相関的あるいは多角的なアプローチを取っている。そのアプローチの特徴と関連付けて内容を紹介しよう。

第Ⅰ部では本論の問題設定と、議論の前提としての方法論及び関連領域の先行研究を取り上げた。戦後の歴史学にとって十五年戦争の研究自体が大きな意味を持ってきた。その中でも旧軍隊に関する研究、例えば軍部がどのような政治過程の中で独自の政治勢力となったか、それでどう戦争を進めていったかという研究は多かった。しかしその軍隊に庶民がどう放り込まれてどのような経験をしたのかといった視点は、ここ数十年でようやく注目されるに至ったものである。

この第Ⅰ部はむろん単なる最新の研究成果の紹介ではない。本論では〈戦場の「今・ここ」を相対化する〉という議論を展開している。敵を殺すことを目的として組織される軍隊、その中で任務を与えられる兵士たちの思考回路においては、戦場で人を殺すことが正当化される。そこではしばしばその目的を達する手段として、戦時国際法に違反する行動すらも正当化されがちである。しかも戦場の外部にいる人間からはこうした戦場での出来事の正当化が行われるプロセスが見え難い。

この見え難さは兵士たちの戦争体験において、彼らが故郷での生活から切り離されて軍隊に入り、更に戦場へほうり込まれるという大きな変化を被っていること、そのプロセスを無視してはその体験を理解しがたいこととつながっている。そして実のところ、兵士たちが戦場から帰り、軍隊を離れ、故郷で元の（あるいは新しい）生活に入るというもう一つの見落とされがちな変化を経た上で戦争について考え、語り、書くことが、多くの戦争の記述の前提になっていることともつながっている。単なる空間の移動ではなくこうした変化のプロセスを、筆者はタイトルにある「征く」「還る」という言葉に込めた。こうしたプロセスに注目することが、戦場の「今・ここ」を相対化するためには必要なのである。

第Ⅱ部は日中戦争開始直後から立ち上がっていく戦場の小説についての研究である。戦場の小説というジャンルが立ち上がっていく様子を、当時のメディア状況と文壇の関心を中心に追っていく。80年代半ばまでの研究では、戦争文学と呼ばれたこれらの作品と同時代の他の小説とのつ

ながりが見え難かった。近年の研究では文学史一般の中に作品を位置づけつつ、小説というメディアが担っていた役割などへの言及もなされ始めている。ただし文学史研究への特化が進んだ分、以前の研究にあった、小説を通して十五年戦争を考えるとという問いが背景に退いたとも言える。

そこで本論は①「満州事変」ではマスメディアが大きく事変を取りあげていたが、多くの作家は戦争を描くことはしなかった（つまりなぜ日中戦争では作家も関わったのか）、②盧溝橋事件（1937年7月）から『麦と兵隊』（1938年7月）に至るまでの、他の作家のルポや小説に描かれた戦場や兵士と、ブームを起こした『麦と兵隊』のそれとの違いは何かを考察していく。いわば作品を取り巻く外在的要因と作品の内在的な分析の両面からこの問題を論じていることが特徴である。

第2章では、文学以外のメディアとの競合によって作家が戦争協力へと追い込まれていったことを論じつつ、同時に文壇の動向を追いながら作家たちの問題関心が、作家の個人的なことや内面から社会的なテーマへ移るという転換の中で戦争文学が立ち上がっていくプロセスを論じた。総合雑誌などの影響が論壇・文壇ともに強く、他ジャンルの書き手との競合によって、ジャーナリズムの注目するテーマ、つまり戦争を作家たちが描かざるをえぬ、あるいは進んで描くに至ったのである。

第3章では戦争文学形成のプロセスの中で重要な位置をしめる三名の作家の作品を通し、日本での生活から兵士（あるいは作家）として中国の戦地へ行くことのギャップや、戦場そのものがどう表現されているかを、当時検閲によって描けなかったものなども含めて考察した。このギャップに注目するのは、中国の戦場で日本兵として振る舞うことを無条件に受け入れた兵士像が作られれば作られるほど、作品から戦争を批判的に捉える具体的な視座が失われてしまうからである。ちなみにここでは従来ほとんど取り上げられたことのない作品、榊山潤「戦場」を扱った。日中戦争開始直後に出たため、まだそれ以前の言説との連続性が強く、主人公の「私」が兵士としての自己を、東京の失業者であったかつての自己の目線から眺めることで、戦場の「今・ここ」を相対化する、同時代的には珍しい作品となっている。

第Ⅲ部は兵士が戦場から還ることを論じたが、第4章で扱った日中戦争期の帰還兵の持った意義というのは、文学研究はおろか歴史学においてもほとんど研究がない。その存在自体一般に知られていないのみならず、存在は知っている歴史研究者であっても、研究の欠落、資料の不足などでほとんど取り上げない。そのためこの章では小説の話に限らず、実証的な歴史研究の側面からも戦時中の帰還者（兵）の存在に光を当てた。

戦時体制下の銃後社会では、戦場の実情を知る帰還者とは戦意高揚にも動員しうるし戦場の現実を暴露しかねないという存在でもある。1939、40年ごろは小説にとどまらず帰還者のメディアでのプレゼンスはかなりのものだった。その一つの頂点は「兵隊作家」火野葦平の帰還であった。戦時中の帰還者に筆者が注目したのは、同時代的に帰還を描いた幾つかの小説が（実証的には仮説の域を出なくとも）資料の欠落を埋める有効な補助線となることで、彼らの存在の意味に気付いたからである。本論が単なる文学研究ではなく、戦時社会研究であるという意味はここに端的に表れているだろう。もちろん当時の小説を考えるための新たな題材も提供しており、そもそも1940年ごろ文壇においてかなり注目された存在でありながら、現在ほとんど知られていない榊山潤という作家を掘り起こしたのはその一例である。また、この時期にあっても戦場の「今・ここ」を相対化し、兵士＝英雄といったイメージを崩しうる可能性を持った石川達三「感情架橋」という作品の重要性も論じた。

第5章では敗戦を経て終戦直後（1945～48年）に三名の作家が復員をどう描いたか、それは敗戦を経た価値観の転換の中でどのような意味を持ったのかを論じた。復員については軍隊経験を持つ戦後派作家も何名かが描いているが、戦時中の帰還者も描いていた三名の作家が復員をどう描いたかを考えることによってこそ、戦時と戦後における「還ること」及び兵士の意味付けの転換を具体的に問えるのである。

戦時中の帰還兵の研究欠落に比べれば、復員兵の研究はある程度存在する。だが冷戦の国内的影響が薄く、かつ最も大量の兵が復員した45～47年ごろの復員の意味はほとんど考えられていない。5章では、無謀な戦争を直接担ったとして復員者が後ろ指さされる存在だった半面で、彼らの多くが実際にはすんなりと社会へ溶け込んでいったことの意味を論じた。それは戦争責任、戦争犯罪等が十分に問われずに来た今日の状況とも関連してくる。

征く、還るというプロセスを描いた小説と、その小説の置かれた言論空間や文学史上の位置、歴史的背景などを多面的に論じることによって、狭義の歴史学からは見え難い兵士像、軍隊像を浮かび上がらせ、同時に狭義の文学研究からは見え難い戦時社会と小説の関係を明らかにする。それによって戦場へ征くこと、戦場から還ることの意味を問うことが本論の狙いである。